

おとしあな

著者	古田 和弘
雑誌名	真実心
号	5
ページ	25-40
発行年	1984-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000724/

おとしあな

古 田 和 弘

只今、学長先生からご紹介いただきました古田でございます。只今のご紹介にありましたように、私は大谷大学で仏教学という学間にたずさわっております、まだまだ駆け出しの、つい先頃始めたばかりの者でありまして、こういう所で満足なお話のできるような勉強をしているわけではございません。しかも本日は、親鸞聖人のご命日に因んでのお集まりと承っておりますが、私の勉強しておりますことは、親鸞聖人が世にお出ましになられる千年も前の中国の仏教の有り様ということでありますので、適わしいかどうかわかりません。けれども、私も一人の人間のつもりで生きておりますから、そういう思いの中で生きている者として、日頃あれ

これ考えておりますことを、こういう機会に聞いていただければと思ってまいりましたわけでございます。

今日の題についてお問い合わせがありましたので、「おとしあな」という奇妙な題を申し上げておきましたが、今日はその「おとしあな」ということについてお話しさせていただこうと思っております。

落とし穴というのは皆さんもご経験があるかもしれませんが、私などは小さな幼稚園か小学校の頃に、砂場で遊んでいまして、誰にも知られないように穴を掘ってそこに木の枝とか紙切れとかを置いておき、そうして砂を被せておく。そうすると、あとから何も知らずにやってきた人が、気付かず踏み抜いてドスンと落ちる。それをどこか陰で見ている、ヤッターと大喜びをする。そういうことを経験したことがあります。うまくいくとおもしろいものでして、またやってみようかということになり、恐い体育の先生を落としたことも思い出になっております。

ところが、これはよくある話ですけれども、自分でつくった穴に自分で落ち込むということが時としてございます。これは漫画の題材にもなる話でありまして、汗水垂らして穴を掘り、

おとしあな

さあ出来た、これでうまく誰かを落とせるだろうと思ったところが、気が付いてみると自分が落っこちていたということがあるわけです。

ですから落とし穴というのは、誰にとっても危険なものである。知らずに通りかかった人にとっても危険であるけれども、それをつくった人にとっても危険である。そういうことを思うのであります。

「おとしあな」ということによって結論的に何を聞いていただこうとしているかといえますと、私どもは何かしら自分なりに人生の価値を見出しておりまして、これこそ自分にとって価値あるものである、これこそ人間にとって大切なものである、このように考えて日夜暮らしているわけです。ところがそのように価値を見出してそこに意味を把握しようとして、そのためにかえってどこかに落ち込んでしまう、そういうことがしばしばあるのではないかと思うのです。

恐らく皆さんは、小学校から中学校、高等学校、大学と、それぞれの考えで、あるいはそれぞれの環境の中で道を選んでここまで来ておられると思います。それはそれなりに意味のあることでありましょけれども、人間は、そういう時には自分の踏み出すべき先に価値を見出さ

なければやっていけないわけでありますから、今日ここに、こうしておいでになるということについても、何かそれなりの価値を見出そうとしておいでになるのではないかと思うわけです。大学に入られて、今日までそれぞれの分野の勉強をしておいでになったことにも、それなりの価値を見出しておいでになるのではないかと思うのです。

しかし、ある事がらに価値を見出すということは、できるだけ人間が不幸にならないように、できる限り落とし穴に落ち込まないようにするために、そうでないところに価値を見出すとすることです。

高校生は、皆さんご経験のとおり、どこか大学へ行きたいと思います。その人は、大学へ行くといいことに価値を見出しているからなのです。ですから大変に苦労して大学に進学しようといえます。けれども、そこに価値があると思う時の思い方と思い込みが問題ではないかと思うのです。

つまり、ある一つの価値を選ぶということは、他の価値を選ばないということでもあります。ある一つの価値にこだわるということは、他の一切の価値あるものから目を逸らすということになります。できるだけいい大学へ進学したい、そしてできるだけいい所へ就職したい、これ

おとしあな

は立派な価値であります。しかし、そこにも大きなおとしあながあるのでありまして、その時に見出した価値のために、他の諸々の価値を見失うことがあるのではないかということでもあります。これは大変恐ろしいことでありまして、自分がつくり出した価値、つまり、自分がつくっておいたおとしあなに自分が落ち込んでいる、自分がつくり出した価値観に支配されて、それ以外のものが見えなくなってくるということです。

そこで、このように親鸞聖人のご命日のような催しがある機会に、我々は、自分が抱いている価値観について、本当にそうなのか、ある意味では価値あることかもしれないけれども最後まで価値あるものなのかを、わずかの時間でも一度立ち止まって考えてみてはどうだろうか、いつも思っているのです。思い込みというのは大変危険なものであります。ここに価値がある、これ以外には価値がないと思いついてしまうことは大変危険なことでもあります。思いもかけないおとしあなに落ち込んでしまう危険があるからです。

実は、ごく最近のことですけれども、私が日常親しくさせていたでいる方から聞いたお話があるのです。その方は折にふれて随筆風のものにそのことを書いていらっしゃるのです、あるいはお読みになった方があるかもしれませんが、大変考えさせられる話なのでご

ざいます。

その方はもう六十歳近い男の方ですけれども、近所にとてもかわいい女の子がおりまして、どういうわけか仲よしというのか、気が合うというのか親しくなって、そんなお年寄りのどこがおもしろいのか知りませんが、よく遊びに来るんだそうです。

ある時、その小さな女の子と縁側に腰かけて話をしていたというんですね。そうしますと、その庭へヒラヒラと蝶々が舞い込んできた。「あ、蝶々だ」といってみておりました。蝶々は庭を飛び回っていたわけです。そうしましたら、これは見ていた人たちも、まして蝶々にとっては全く思ひもかけないことなのですが、おとしあながあったわけで、そこに大きなクモの巣があったのです。蝶々は、ものの見事にそのクモの巣にひっかかってバタバタ暴れていた。その光景を見た女の子は、「あっ」と声を発して立ち上がったというのです。

大体、だれでもそうですが、蝶々なんてものはかわいいものです。蛾は嫌いだけれども蝶々は好きだと、血眼になって蝶々を探しているけれども蛾を見ると叩き潰す。どちらも似たようなものだと思うのですが、やはり蝶々はかわいいものです。

それで、その少女が「あっ」といって立ち上がったので、その方は、むごい光景を心やさし

おとしあな

い少女に見せてはならないと、とっさに思ったそうです。クモの巣にひっかかった蝶々は、そのまま放っておきますとしばらくはバタバタしているでしょうけれども、力尽きて、やがて近付いてくるクモに襲われるわけです。その方は、そういう光景を見せてはあまりにもむごいではないかと考えたらしいのであります。そこで、とっさに裸足で庭へ飛び出して、その辺にあった箒か何かでクモの巣を叩き落としたというのです。少なくとも蝶々は、クモに襲われることから免れることができたわけです。そこでその方は、ほっと一と息ついたというのです。

そうするとその少女は血相を変えて、「おじさん、ひどいじゃないか」と言ったらしいのです。最初はその意味がわからなかったというのです。しばらくは二人とも、ぼう然と向かい合っていたらしいのですが、そのうちふと少女は、「クモがかわいそうだ」と洩らしたそうです。

そういう出来事を私に話してくれまして、その時しみじみ語っていたことですが、私どもは蝶々とクモを比べると、蝶々のほうはかわいいがクモはもう一つかわいいと思えない。クモはできることならなるべく見たくない、自分の身边にいてほしくないと思っている。しかし考え

てみれば、その少女のいうとおりでありまして、蝶々も生き物ならクモも生き物であります。その方は少女にむごたらしい光景を見せたくない。そしてクモの巣を叩き落としたことよって、それが成功した、うまくいったと考えたわけです。ところがそこに決定的なおとしあながあって、少女の心を大きく傷つけてしまう結果になってしまったわけです。

その時に問題になるのは思い込みであります。価値観であります。その少女も恐らくそうであるかもしれませんが、その方にとって蝶々は価値があり、クモには価値がない。ですから蝶々は大切にしなければ、クモは大切にしない。

これは自分自身を含めて同じ生き物でありますから、決定的な失敗であります。しかもそれを、自分だけの配慮、自分に対する心遣いだけでなしに、本当に純粹な心を持って育っていくであろう少女の前でそれが起こったということに大変なショックを受けたと、その方はしばしばその話をしておられます。

考えてみますと、例えば、健康であるということに私どもは価値があるといえます。しかし健康であるといいましても、ここから健康であって、ここからは健康でないということはないのでありまして、少なくとも病気でないということが健康なのであります。ところが、生まれ

おとしあな

てから死ぬまでを全く健康で通せる人はほとんどいないわけで、いくら健康であっても必ず亡んでいくわけであります。そのことに我々は価値を見出そうとしているのです。

皆さんのお気持ちのうえでは美貌などが価値があるかもしれませんがね。自らの美しさを保つためにはあらゆる努力をなさるのではないのでしょうか。それは恐らく、自分が美しいと思っているから、それを守らなければならないわけです。しかし、美しいというのは一体何なのか。皆さん、左右をご覧いただくというわけです。絶対に美しいということはあり得ないわけで、隣りの人に比べて自分のほうが美しいということなのです。美人というのは、美人でない人によってつくられているわけです。ですから美貌といっても、そこに決定的な価値があることなのかどうか。美しいほうがいいには違いはないけれども、しかしそのために、なり振りかまわずあらゆる手段を講ずるといえるのは、ひょっとして滑稽なものではないのでしょうか。それは自分で生み出した価値に対して全く疑わないで、そのことのために、他のあらゆるものを見失ってしまうことなのです。そこに、おとしあながあるわけです。

この機会にもう一つ、引き合いにしようと思うお話があります。これは大乘仏教の經典の中にあるお話でありまして、お聞きになった方があるかもしれませんが、『維摩經』という經典

の中に、こういうお話があるのです。

釈尊には、大変人格のある立派なお弟子が沢山おいでになりましたが、その中でもとりわけすぐれた人格者といわれた人に、摩訶迦葉^{マカエフ}という人がいらっしゃいました。この人は、釈尊が亡くなられてからその教団を統率して多くの仏陀のお弟子たちを取り纏めていった、非常に功績の高かった人です。ところが『維摩經』に出てくる摩訶迦葉の話というのは、あまりかんばしいものではないのです。

当時のお坊さんたちは、夜明けに一回と、正午までに一回、食事をとります。午後は、太陽が真上に来たあとは食事をとらないのです。修行の妨げになるからでしょう。食事をするために、乞食^{こじき}といいますが、家々を巡って食べ物を貰って歩くわけです。当時のお坊さんは、自分で料理をしないといけないという戒律がありました。生産活動に一切従事してはならないのです。生産ということは、今日の我々の常識からいうと大変立派なことのように思いますが、生産活動に従事し、料理をすることは、我欲^{ガヨク}というか、欲望の出発点になる。今日これだけ生産したのだから、明日はこれだけ生産したいという心がどうしても働くので、最初から生産活動を放棄するわけがあります。従って自分で耕したりはしないのです。その代わりに、町や村を

おとしあな

回って、托鉢といいますが、家々で残り物を貰って食べるのです。仏陀釈尊もやはり同じようにして、そういう生活をしておいでになったわけですが、それが仏教教団の出発の頃の常識だったわけです。

ある日、摩訶迦葉は、日課になっている托鉢に出かけたのですが、そこで彼は考えたのです。立派な、お金のありそうな家へ行くと、多分沢山の、自分が一食食べるのに十分な食べ物をくれるだろう。それに反して貧しい家へ行けば、残り物もないかもしれないし、それだけ何軒も回らなければならないから大変だ。しかし、と彼は考えたのです。人に食べ物を差し出すことは、布施といって、これはよい行いです。ですから、金持ちの大きなお屋敷へ行けば、私に対して布施する人は一人ですんでしまう。自分が食べるのは一軒で貰う分で十分である。ところが貧しい人のところへ行けば、ほんの少しづつかもしれないけれども、何人かの人が布施をしてくれることになる。そうすると、布施をする機会を持つという点で、めったにできないよい行いをすることができる。こう考えて彼は、貧しい人の家を選んで訪ねて行き、托鉢するわけです。

大乗仏教の精神からいいますと、自分がよい行いをするだけではなく、よい行いをする機会

をできるだけ多くの人に与えることは、非常に大切なことなのです。ですから、摩訶迦葉の選んだ方法は、その意味では大変立派であったわけですから。

ところが、『維摩經』の主人公、これは維摩詰びまじつという、大乘仏教の理想的な人物ですが、この人が摩訶迦葉の行動を見て厳しく批判したのです。一見して大乘仏教の精神に叶っているようだけれども、実は、そこには大きな欠陥がある。摩訶迦葉はそこに価値があると思ってそういう方法を選んだけれども、選んだその価値が、実は彼にとって決定的なおとしあなになっている。それは彼が、人々を区別したということである。お金持ちであろうと貧乏人であろうと、お金によって価値の違いを見出すということは、それを平等に考えようとした摩訶迦葉の心の中に、実は既にお金に対する盲信があった。それがおとしあなであるということなのです。そこで維摩詰は摩訶迦葉の行動を厳しく批判するのです。

私どもは、これはよいことである、価値あることであると思うからこそ、いろいろなことをします。その、よいことであると思ったそのことの中に、実は、ひょっとして大きなおとしあながあるのではないかということに気付かねばならないと思うのです。こういう勉強をすればこういう資格が取れるであろうと思う。それは確かにそうかもしれませんが。そこには価値があ

おとしあな

るわけです。しかし、そう思った心のどこかにおとしあながあるかもしれないのです。他の、もっと本当に価値あるものから目を逸らせてしまう危険があるからです。

これは私自身の経験ですが、市バスには優先席というのがあります。たまたま私が乗り合わせていた時ですが、椅子席はほぼ満席でした。そこへおばあさんが乗り込んで来まして、バスが発車する前に急いで優先席へ駆け寄ったわけです。バスのアナウンスでも、お年寄りや身体の不自由な方のために席を譲れといっています。おばあさんが席へ駆け寄っていくと、そこにちょうど皆さんくらいの女の人が腰掛けていた。するとおばあさんは、そこは自分の坐るところだから代われと言ったのです。その後ろの席にいた男の人が、「おばあさん、いいじゃないですか。こっちへ坐りなさい」と言ったのですが、おばあさんは、「いや、そちらでなく、こちらが優先席だから、私はここへ坐るんだ」と言っているんです。えらい剣幕で怒鳴っていて、若い女の人は、本当に恥ずかしそうにまっ赤な顔をして下を向いているのです。周りの人が心配していろいろ言うんですが、おばあさんは頑として譲らない。おばあさんがあまり厳しい顔で怒鳴るものですからその女の人は、ぱっと顔を上げて立ち上がり、吊り革にぶらさがったのです。おばあさんは、そのイスに腰かけてしまいました。

これはよくある話ですが、ここで我々が考えてみなければならぬことがあります。優先席を設けることは大変重要なことで、価値の高いことです。お年寄りや身体の不自由な人を、そのようにして大切にするという心がけは実に大切なことで、そのためには我々は、可能な限りの努力はしなければならぬわけです。それはきつといいことなのです。

しかしながら、もし、優先席というものがなければ、おばあさんはあいうことをいわずにすんだはずですし、若い女の人も、ああいう恥ずかしい、くやしい思いをしなくてすんだかもしれない。どれもこれもが優先席であればよかったわけです。我々は本当の善意から、本当に価値があると思うから何かをなさうとするわけですが、しかしそれをなしたために、かえって新しい、苦しい困難を生み出してくることがしばしばあるのです。

今の話で、だれ一人、皆が不幸になろうとして優先席を設けたとは思えません。少なくともハンディキャップのある人たちに、快適さを譲るべきであるという善意から出たものでしょう。しかしながら、そのためにまた新しいギスギスした人間関係が生まれてくるのです。人間の心とはそうしたもので、少なくとも京都の市バスについていえば、京都市民は恐らくもう一つのおとしあなに、今、落ち込んでいるわけです。折角価値があると思ったことに、非常に決

おとしあな

定的なおとしあながあったということになってしまったわけです。

我々は、よいことであろうと、あるいは自分にとって都合のよいことであろうと、なんでもそうですが、価値を見出して、その価値を求めてあらゆる努力をします。ですから先程の話からすれば、そこが実は一番危険なわけです。これが幸福なんだと思った時、そのことの中に一番危険が潜んでいると思うのです。

私は、親鸞聖人のことはそれほどよく承知しているわけではありませんが、聖人は、人間はどんなに善意を尽くしても、どんなに自分に忠実であろうとしても、それをすればするほど必ず穴に落ち込んでしまう、そういうことを真剣に取り上げて、それではその原因はどこにあるのか、どうすればそういうおとしあなに落ち込まないですむのか、そういうことを私どもに語り遺してくださった人ではなからうかと思っています。

私は元々、仏教については全く素養のない、縁のない人間でありましたが、昔ある先輩に勧められて「歎異抄」を読んだことがあります。大変苦勞して読んだ記憶がありますが、その時、非常に驚いたのです。世の中にこんな人がいたのか、こういう思いに立てる人がいたのかという驚きを感じた経験があります。今も申しましたように、我々が価値ありと思っているも

のの中にこそ、最も大きなおとしあながあるのだということを、生涯、身をもって語られた方のご労作、それが「歎異抄」であります。

教育につきましても、我々の日常のあらゆる問題に関しましても、そういうおとしあなが無限にあるのだということをこの機会に少しお考えいただければと思ひまして、私もかねがねそういうことを考えているものですから、お聞きただいて何かのご参考になればと思つた次第です。

大体時間が来ているようですので、この機会にお聞きいただくことはこの辺で終わらせていただきます。ご静聴有難うございました。